

国 道 116 号 線

# 埋蔵文化財発掘調査報告書

きつね やま  
狐 山 塚 群

1 9 7 9

新潟県教育委員会

国 道 116 号 線

# 埋蔵文化財発掘調査報告書

きつね やま さか ぐん  
狐 山 塚 群

1 9 7 9

新潟県教育委員会

## 序

国道116号線は柏崎市を起点として国道8号線と別れ、国鉄越後線にはほぼ併行して新潟市に至る一般国道で、柏崎と新潟の経済圏を結ぶ大動脈であり、沿線地域住民の生活道路として大きな役割を担ってきた。近年、特にその利用が盛んになり、交通量も増加の一途をたどっている。建設省北陸地方建設局でも交通量の緩和を図るため、西山町から寺泊町に至る国道116号線の改修工事計画を立案し、それにかかる遺跡の取り扱いについて県教育委員会とたび重なる協議を行った結果、本遺跡については回避することは避け得がたいという結論に達し、記録保存をすることになった。

本塚群の調査では、中世の骨蔵器が検出され、中世墳墓の一形態を解明することができたことは考古学的にも地域の歴史を考えるうえでも有意義なものと考えられる。

最近、各地で中世墳墓の発掘調査が行われているが、本塚群の成果が今後の研究の一助となれば幸である。

なお、本調査に参加された調査員はもとより、多大な御協力、御援助を賜わった西山町教育委員会及び西山町役場、更に計画から調査の実施に至るまで格別の御配慮を賜わった建設省北陸地方建設局上越国道工事事務所の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和54年3月

新潟県教育委員会

教育長 米山市郎

## 例　　言

- 1 本報告書は新潟県刈羽郡西山町大字黒部字狐山地内に所在していた狐山塚群の発掘調査の記録である。発掘調査は国道116号線改修計画に伴い、新潟県が昭和53年度に建設省北陸地方建設局から受託して実施したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、昭和53年5月15日から5月31日まで実施したものである。
- 3 遺物の整理・復元作業は県教育庁文化行政課埋蔵文化財係の職員があたった。
- 4 遺構・遺物の実測、写真撮影及び挿図などの作成は調査に直接たずさわった戸根与八郎・竹田陽子があたった。
- 5 発掘調査における出土遺物は一括して県教育委員会が保管・管理している。
- 6 本報告書の執筆は発掘担当者を中心にして調査員が協議のうえ、I・II・III・Vを戸根が、IVを竹田・戸根が執筆したものである。
- 7 発掘調査にあたり、参加者各位ならびに西山町の温かい御支援と御協力を賜わった。また、建設省北陸地方建設局上越国道工事事務所から種々の御配慮を賜わったことを記して感謝の意を表する次第である。
- 8 発掘調査から本書の作成に至るまで下記の諸氏から種々の御指導と御助言を賜わった。(敬称略)

駒形 勉、藤田富士夫

## 目 次

I 序 説	1
1. 発掘調査に至る経緯	
2. 発掘調査の経過	
II 遺 跡	5
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
3. 周辺の塚等の分布	
III 立地と現状	9
IV 外部形態と内部構造	11
1. 1 号 塚	
2. 2 号 塚	
3. 3 号 塚	
4. 掘り込み状遺構	
V 総 括	21

## 図版目次

- 図版第1図 狐山塚群の遠景（西側から）、狐山塚群の遠景（東側から）  
図版第2図 1号塚・2号塚の近景（北側から）、2号塚・3号塚の近景（南側から）  
図版第3図 1号塚の全景（南側から）、2号塚の全景（北側から）  
図版第4図 3号塚の全景（北側から）、発掘スナップ  
図版第5図 1号塚土層断面、1号塚北側周溝、1号塚南側周溝  
図版第6図 1号塚基底部（北西から）、1号塚基底部（北から）  
図版第7図 3号塚基底部（南から）、3号塚基底部（北から）  
図版第8図 掘り込み状遺構（南から）、掘り込み状遺構内石造物出土状態  
図版第9図 石造物出土状態（北西から）、石造物出土状態（西から）  
図版第10図 遺物の出土状態と出土遺物

## 挿図目次

- 第1図 狐山塚群周辺の地形 ..... 4  
第2図 周辺の地形 ..... 4  
第3図 周辺の塚等の分布 ..... 7  
第4図 狐山塚群全測図 ..... 10  
第5図 1号塚実測図 ..... 12  
第6図 1号塚断面図 ..... 折込み  
第7図 1号塚出土遺物 ..... 13  
第8図 2号塚実測図・断面図 ..... 14  
第9図 3号塚出土遺物 ..... 15  
第10図 3号塚実測図 ..... 16  
第11図 3号塚断面図 ..... 16  
第12図 掘り込み状遺構実測図 ..... 18  
第13図 石造物出土実測図 ..... 19  
第14図 掘り込み状遺構出土遺物1 ..... 20  
第15図 掘り込み状遺構出土遺物2 ..... 20  
第16図 塚分布模式図 ..... 22

# I 序 説

## 1. 発掘調査に至る経緯

国道116号線は柏崎市から国鉄越後線に沿って西山丘陵の向斜谷を通り、新信濃川を渡り、西蒲原郡の弥彦山・角田山麓を経て新潟市に至る延長76.1kmの国道である。最近は国の工場再誘導と農村再開発のための中小の工場が立ち並び、また沿線の柏崎市及び刈羽村地内には東京電力柏崎原子力発電所の建設が進められようとしている。このため、本国道の利用は長岡市を経て新潟市へ至る国道8号線に比して柏崎市から新潟市までは時間的にも半減され、その利用度も盛んになって交通量も多くなっている。建設省北陸地方建設局でも交通量の増加を緩和するためにも国道116号線改修工事の計画をたて、昭和50年12月15日付けの文書で三島郡寺泊町北曾根から刈羽郡西山町和田に至る計画予定線3本について幅200～300mで埋蔵文化財の所在についての照会が県教育委員会にあった。県教育委員会は既存の遺跡の確認を遺跡カードで行った後昭和51年3月から6月にかけて文化行政課の職員が主体となって計画予定線3本について遺跡分布調査を実施した。この結果、西山町6遺跡、出雲崎町19遺跡、和島村6遺跡、寺泊町15遺跡、総計56遺跡が確認され、昭和51年7月6日に建設省北陸地方建設局長に遺跡分布地図に遺跡一覧表を添えて分布調査の結果を文書で回答を行った。今回の発掘対象地となった狐山塚群については、昭和51年6月21日から23日まで3日間にわたって調査をした際に新しく3基発見されたもので、名称は小字名をとって「狐山塚群」とし、東から西へ1号・2号・3号塚と番号を付した。昭和52年1月建設省北陸地方建設局長から口頭で西山町黒部所在の狐山塚群についての位置及び規模等について教えてくれという依頼があった。7月には入って県教育委員会は法線及び本塚群の取り扱いについて協議するよう指導した。11月建設省北陸地方建設局長から協議書が提出され、翌昭和53年2月建設省北陸地方建設局と県教育委員会は西山町和田から同町坂田に至る間の法線協議を行った。本塚群が予定道路線の出入口にあたり、保存をするには広大な耕地をつぶし、地形上も地すべり地帯を通り道路効果も一段と落ちるため、保存する事は困難であるという結論に達したので、発掘調査を実施して記録保存をすることになった。更に、費用の負担及び発掘調査の期日について話し合いが行われ、費用は原作者である建設省が持ち、県教育委員会は発掘調査を昭和53年5月から6月の間に実施することになった。4月には入って調査経費の細部説明や、現地には入るまでに立木や作物の処理等の事前打合せを行い、発掘調査は5月15日から5月31日までの17日間にわたって行う事になった。5月8日関係諸機関と調査区域等の最終確認を行い、西山町教育委員会及び黒部・西山の総代に調査の概要を説明し、作業員の募集等について協力を頼った。しかし、作業員の確保は田植の

時期と合致するため、2集落のみでは困難な状況であった。このため地元教育委員会と相談し、関心のある人を全町内から募集する事にした。更に、立木の処理について建設省と地権者とで多少の意見の相違があったが、建設省側の努力で解決した。作業員も西山町各地から有志が集まつたために、予定通り昭和53年5月15日から発掘調査を実施する事になった。尚、委託契約は昭和53年5月15日付けで建設省北陸地方建設局長と県知事君 健男の間で締結された。

## 2. 発掘調査の経過

狐山塚群の発掘調査は新潟県教育委員会（教育長 米山市郎）が発掘調査主体者となり、県教育庁文化行政課埋蔵文化財係の職員を中心に、県内の考古学研究者・地元文化財関係者を調査員に依頼して協力を得た。また、地元の黒部、浜忠、札押、田沢、二田、西山の各集落の有志の方々には調査作業員として協力を得て昭和53年5月15日から5月31日までの17日間にわたって発掘調査を実施した。

発掘調査は予定法線敷地内全域（約264m<sup>2</sup>）に2m四方のグリッドをかぶせ、遺構及び遺物の出土状況などによって全面発掘に切り替えて行く事を基本的態度とした。遺物は小片を含めた1片ごとに一連番号を付し、出土地点の混合を極力さけるように努めた。

- 5月15日（晴） 新潟から現地へ器材・資材の搬入を行うと共にグリッドの基線方向を決定する。基本グリッドの杭打ちを行う。
- 5月16日（晴） 塚群の全測図を縮尺60分の1で20cmセンターで作成する。塚群の遠影写真及び各塚の現状写真の撮影を行う。
- 5月17日（晴） 作業員・調査員・地元教育委員会が参列して塚供養祭を般若寺住職のもとで行う。午後から1号塚に着手する。C-3のマウンド上部から28cm下で中世陶器の胴部下半が検出された（図版第10図11）。他に口縁部片が2点検出されたが、いずれも攪乱された土から検出されている。
- 5月18日（曇） B-E-1~5に着手する。この結果、周溝がある事が判明し、周溝幅は約2mで円形に回っている。東側及び西側では明瞭に認められるものの南側と北側は尾根の緩斜面にあたっているためか周溝の深さは浅く、その痕跡はかすかにしか認められなかった。
- 5月19日（雨） 1号塚の周溝の精査を行う一方、土壙が存在するのか否か調査をする。土壙は存在せずに中世陶器そのものが骨蔵器として利用されたものと判断された。C-5の周溝内より土師質土器の細片が1片検出された。また、C-6・7の第2層から土師器片・須恵器片が1片検出された。いずれも単発的でまとまってはいない。
- 5月22日（雲） 2号塚・3号塚に着手する。C-D-7~10では人的な土盛は認められ

ず2号塚そのものの自体は塚でない事が判明する。C-16で土師器の高环脚部片が1点検出される(図版第10図14)。前日に引き続いてC・D-5～7を掘り下げるC-7で宝篋印塔・五輪塔の残骸が検出された(図版第9図)。また、B-5で須恵器の蓋片、B-6で縄文土器の甕洞部片が各々1点ずつ検出された。

- 5月23日(曇) 3号塚に周溝がし字状にめぐっている事が判明する。また、C・D-5～7では掘り込み状の遺構が検出され、土層断面から1号塚の裾部を削り取って造成されていることが判明した。
- 5月24日(晴) 1号塚・3号塚を含む全体を精査した後、周溝及び基底部面の横断面図・平面図の作成を行う。発掘完了後の写真撮影を行う。
- 5月25日(晴) セクションベルトの除去を行うと共に、塚の基底部面を各塚ごとに十字で更に掘り下げる。遺構・遺物は全く検出されず、地山層の上に土盛をして塚を造成したものと判断された。
- 5月26日(晴) 補足調査を行った後、遺物・記録の点検を行い発掘作業を終了する。
- 5月27日(晴) 器材の撤収及び関係諸機関にあいさつ回りを行う。
- 5月29日(曇) 本塚群に対する聞き込みを行う。
- 5月30日(雨) 調査員の和田又治氏及び町教育委員会伊比弘毅主事の案内で西山町内の塚の分布調査を行い新たに10遺跡を確認する。
- 5月31日(曇) 前日に引き続いて分布調査の補足調査を行った。

なお、本塚群の発掘調査は下記の人員構成で実施した。

調査担当者 戸根与八郎(県教育府文化行政課学芸員)

調査員 斎藤 基生(県教育府文化行政課学芸員)

竹田 陽子(県教育府文化行政課嘱託)

品田 定平(新潟県文化財保護指導委員)

和田 又治(西山町文化財調査審議委員)

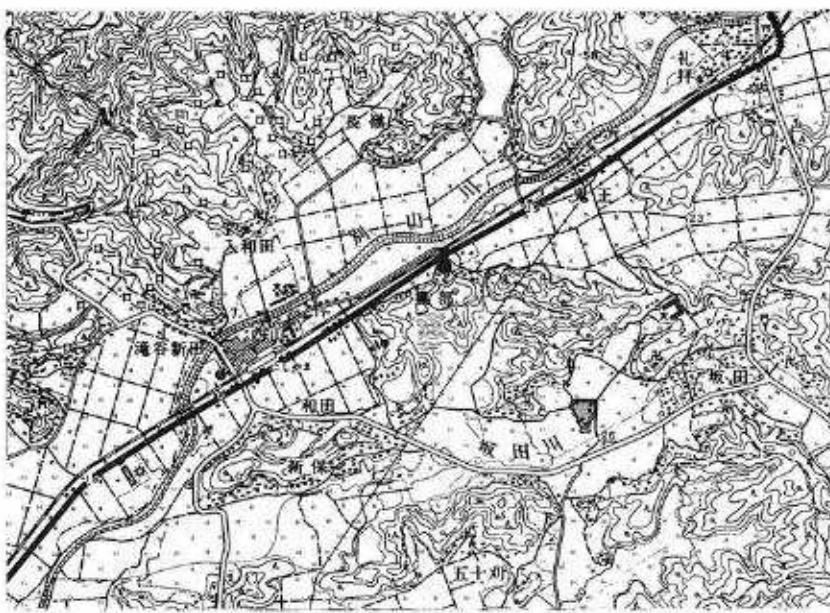
池田 正栄(西山町文化財調査審議委員)

協力員 西山町教育委員会

岩下 義則・近藤 好光・田辺 要三

事務局 湯本 武(県教育府文化行政課副参事)

森田 長治(県教育府文化行政課主事)



第1図 狐山塚群周辺の地形 (1/2.5万 西山) (国土地理院発行)



第2図 周辺の地形 (建設省提供)

## II 遺跡

### 1. 地理的環境

西山町は刈羽郡の北部に位置し面積56.78km<sup>2</sup>を有する平野部の農村地帯で、従来、刈羽郡の北部郷といわれた地帯でもある。平野部のほぼ中央を流れる別山川の両岸は丘陵性の山地で、丘陵の連なりは北北東～南南西の方向を示し、基本的には二本の背斜構造で構成されている。この地域はかって西山・尼瀬に代表される日本有数の油田地帯であり、地形も石油構造といわれる背斜軸・向斜軸のうねりにそのまま支配され、丘陵の連なりも河川の流れも北北東～南南西の方向を示している。別山川の西側は標高80～90mの低い丘陵で西山丘陵と呼称され、北は国上山・弥彦山・角田山へと続いている。西山丘陵の構造線に直交する東側は数多くの谷が形成され、解析が著しく進んでいる。西側は急崖をもって日本海に接し、古くは「越の浦」とも呼ばれた所である。別山川の東側の丘陵は信越国境の鍋倉山・天水山などの東頸城丘陵を源にする曾地丘陵で、曾地峠・妙法寺峠・地蔵峠・薬師峠・小木ノ城と走り、高度を徐々に下降してその北端は三島郡寺泊町、即ち新信濃川の左岸で新潟平野にその姿を沈めている。本丘陵の東側及び西側も西山丘陵の西側と同じように数多くの谷が形成されて解析が著しく進んでいる。これらの丘陵の間を流れているのが延長19kmの別山川で、三島郡出雲崎町との境界付近にある西山町甲戸の巣鴨沢を源とし、中小の坂田川・後谷川などの水を集めて刈羽村滝谷で平野部に出、柏崎市山本で鶴石川に合流して日本海に注ぎ込んでいる。別山川にはいくつかの用水堰があったが、以前は両岸に完全な堤防がなかったために毎年洪水に襲われ、特に明治30年8月の水害はひどく刈羽・柏崎地区で当時の金額で158,100余円の巨額に達したといわれている。<sup>(註1)</sup> 別山川の水利関係は西山町では内郷・二田地区の一部をうるおすのみであり、西山町南部から柏崎市北部にかけては、丘陵の先端部と先端部をつないで沢地に水を溜めるかんがい用の池が多い。<sup>(註2)</sup> 別山川の両岸にある丘陵の裾部は新第3紀の灰爪層で、砂質泥岩を主とし、夏川石と呼ばれる石灰質の有孔虫・石灰藻や貝殻片を豊富に含む細粒砂岩を多くはさむ地層からなっている。<sup>(註3)</sup> 表面の土壤は海岸部が砂丘性の、丘陵部が残積性の未熟土壤で生産力は低く、沖積面も細粒グライ土壤で、ほとんど水田化しているものの排水不良といわれている。いずれにせよ、別山川流域は別山川とその支流である中小河川が作り出した氾濫性の冲積平野で、土地の利用に便利なように丘陵の裾部に現集落が立地し、南へ下るにつれて溜池をかかえている傾向が強いといえよう。

註1 西山町誌編纂委員会「第5章 農業」(「西山町誌」) 昭和38年

- 2 新潟県「新潟県地質図」・「新潟県地質図説明書」 昭和52年
- 3 経済企画庁総合開発局「表層地質図・土壤図」土地分類図15（新潟県） 昭和48年

## 2. 歴史的環境

狐山塚群の位置している西山町は律令時代にあっては三島郡<sup>みしま</sup>の内にあって、その範囲は現在の柏崎市・刈羽郡と考えられている。倭名類聚抄によれば本郡には三島・高家・多岐の三郷があり、三島と多太に駅馬があったと延喜式に記載されている。三島は今の柏崎市下宿付近に、多太は多岐の誤りともいわれ柏崎市高浜町宮川に比定されているが、それぞれ諸説があって定<sup>(註1)</sup>ではない。また式内社といわれているものとして、西山町には御島石部神社と石井神社が石地に、多岐神社が別山に、物部神社が二田に所在しているが、社伝ではその根拠を明確に把握し得がたいものの開発の古さを物語っている。中世になると三島郡は刈羽郡と私称され郡内には長橋荘<sup>(註2)</sup>、佐橋荘、比角荘、鶴川荘、原田保(荘)が存在していたといわれているが、各荘ともにその荘域を示すようなものは現在確認されておらず、地名ないしは古文書等である程度の荘域を憶測するのみである。西山町一帯から刈羽村と柏崎市の一部にかかる地域は長橋荘と推定されているが、長橋荘の名は中世の確実な資料には見られず、江戸時代以降の史料・史書に見えるのみで、元祿7年の「三島郡長橋庄野崎保内寺尾村鑑帳」には長橋荘と野崎保は重ねられて用いられている。野崎保も中世の史料には表われず、江戸時代の天和換地帳の内題にその名が見えるのみで、当地域が長橋荘なのか野崎保なのかについては判断し得がたいのが現状である。正平19年に上杉憲顕が越後へ守護としては入ってきてから慶長3年に上杉景勝が会津に移封されるまでの233年間は上杉氏の支配を受けている。その後慶長3年に堀秀治が越後領45万石を賜わって春日山城主となり、慶長15年からは松平忠輝が長野県の川中島から75万石で福島城には入り、越後全域と信州の一部を支配している。元和2年からは西山町は分割統治となり、椎谷藩主・堀直之、長岡城主・堀直寄、長峰城主・牧野忠成の諸大名と幕府直割領の4分統治となっている。この後数多くの支配者の変遷を経て明治維新を迎えている。

註1 三島駅については「大日本地名辞書」は柏崎市下宿を「上代歴史地理新考」は今の柏崎市柏崎を「柏崎編年史」は柏崎市塔の輪（東の輪）に比定している。多太駅については多岐郷および式内多岐神社と結びつけ「日本地理志料」は多岐神社を刈羽郡別山村にあると記し「大日本地名辞書」は詳ならずとしながら柏崎市宮川にあて「柏崎編年史」は柏崎市曾地に比定している。「上代歴史地理新考」は「今の刈羽郡高浜町か」と記している。

2 金子 達「刈羽郡の荘・保」かみくひむし第21号 昭和51年  
3 「温古の栄」・「越後野志」・「西山町誌」の諸記述による。



第3図 周辺の塚等の分布  
(国土地理院発行 昭和45年「出雲崎」昭和48年「柏崎」1:50,000原図)

### 3. 周辺の塚等の分布

第3図は狐山塚群周辺の塚及び山城の分布図で総計38遺跡を示したものである。山城については昭和50年3月県教育委員会が刊行した「新潟県遺跡地図」によったが、塚についてはその後加筆されたものも多い。特に、塚については調査が充分でないために、確認された塚以上に存在するものと推定される。なお、塚の性格・年代などは発掘調査が行われていないために明らかにすることはできない。

本地域の塚をグルーピングすると①海岸沿いにあるもの、②別山川及び島崎川の流域にあるもの、③山間地内にあるものと3つに別けられる。①に属するものは8のノロシ台塚（直径6m、高さ1.5m、円形）である。このグループは比高が約70～80mを測り、本地域の塚中において最高位置に立地している。②に属するものは1の百塚（40基）、2の菅谷塚群（16基）、3の多岐の脇塚群（5基）、5の内越塚群、6の向平塚群（5基）、11は百塚（20余基）、12の京井谷塚群（6基）、13の礼拝塚群（5基）、14の狐山塚群（3基）、16の大坪塚群（3基）で、本地域中分布が密で、しかも群として把握されるものが多い。形態は、大半が円形を呈しているが、1の百塚、6の向平塚群、12の京井谷塚群の中に方形のものも存在している。規模は円形のもので3～12m、高さ1～1.5m、方形のもので一辺6～10m、高さ1.5～2mを測る。6の向平塚群は戊辰戦争の際に戦死した水戸藩士を埋めたものと言われているが、53年度に中世の土葬人骨が3体と古銭が6枚近接した畠地から発見されている。本地域の塚の分布及び立地を詳細に見ると塚群の多くは別山川及び島崎川沿いの集落付近までのびる丘陵の先端部付近に立地している。これは①・③のグループにも言えることである。分布状態については別山川及び島崎川の両岸に見られるものの、別山川流域のみを取り上げると、出雲崎町との境界付近、即ち別山川の上流部においては左岸に、灰爪～礼拝にかけては右岸に、礼拝から刈羽村及び柏崎市にかけては左岸という様に、相対する対岸に塚が分布しないという傾向がある。おそらく別山川の流路が問題になってくると共に、当時の道路・集落と密接な関係を持っているものと推察される。③に属するものは23の熊上A塚群（6基）、24の木割田塚群（6基）で、23は支谷の最奥部に、24は盆地状地形を眼下に見おろす高所に位置している。24の木割田塚群からは、木炭片と鉄片らしきものが検出されている。

全体的に塚群の分布及び立地を見ると、塚群の立地する丘陵の各主要尾根上には山城があり、山城も地形的分断によって各々の位置を占めている。たとえば、4の高内城跡に3の多岐の脇塚群、7の大崎城跡に6の向平塚群、12の京井谷塚群、10の鎌田城跡に11の百塚・8のノロシ台塚、17の赤田城跡に16の大坪塚群、19の亀岡城跡・20の二田城跡・21の物見山砦跡に13の礼拝塚群・14の狐山塚群というように、塚と山城は有機的関連性を持っているものと考えられる。更に中世村落のあり方、その中ににおける信仰の問題を解明するとともに旧道の調査・石造物等の分布調査を行う事によって塚の存在理由が一層裏付けられるものと思われる。

### III 立地と現状

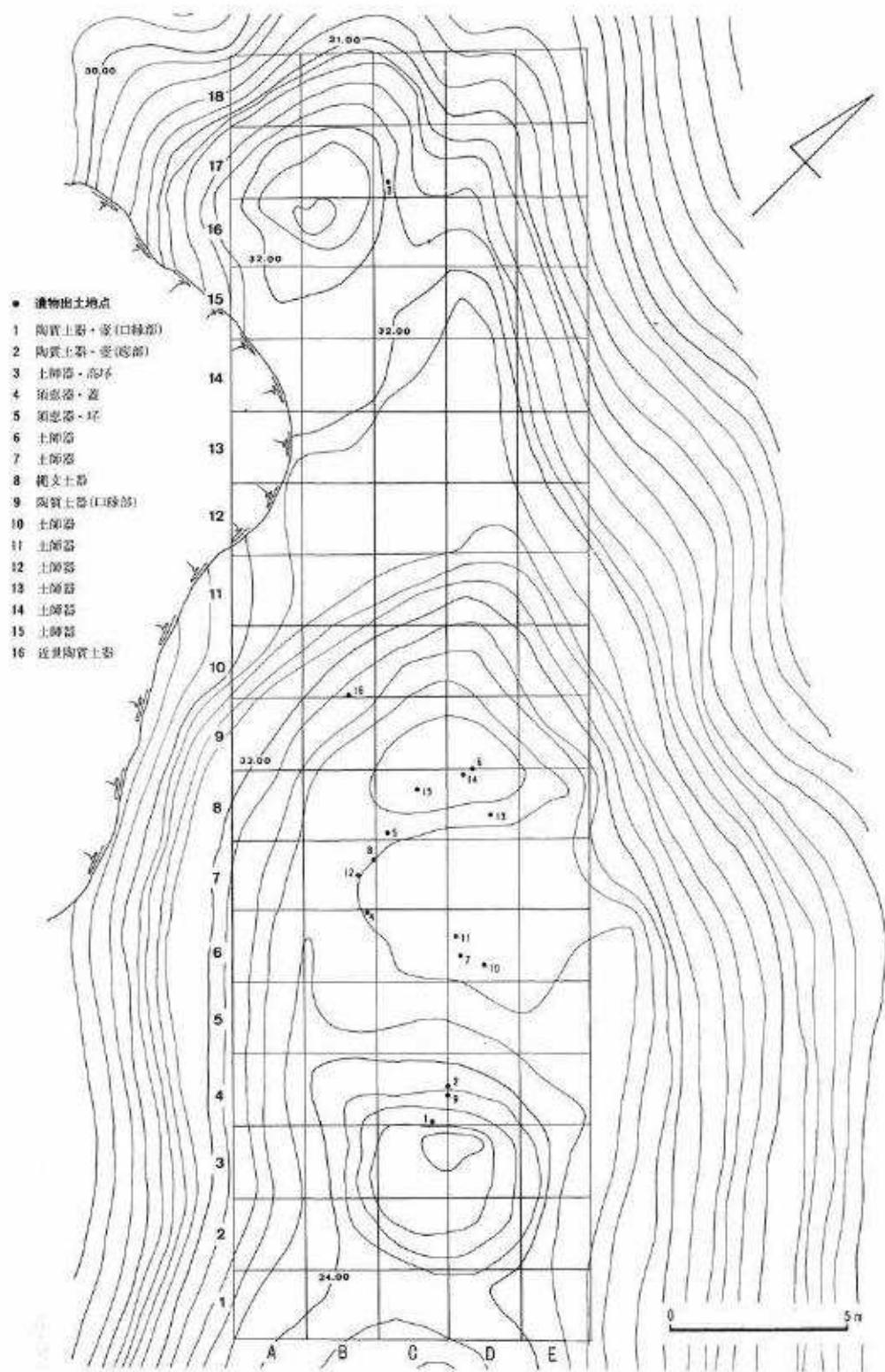
本塚群は刈羽郡西山町大字黒部字狐山39番地3・44番地甲に所在し、曾地丘陵の物見山（標高260m）から西へ派生する一支陵がゆるやかに高度をおろしてくる先端部の独立丘陵上に立地している。この独立丘陵は標高45mを測り、南側及び北側へは緩かに高度をおろすのに対して、東側及び西側は急傾斜となって急崖を形成している。北側の先端部は国鉄越後線や国道116号線工事の際に削り取られ、かつては国道116号線・越後線を越えた墓地付近まで伸びていたといわれている。塚群は北側の突端に近いゆるやかな尾根上に南北方向で3基直列状に並んでいる（第2図・図版第1図）。標高は約35mを測り前面は国道116号線・越後線を介して別山川の沖積地を臨み、東側には礼拝塚群を臨むことができ、水田面との比高は約21mを測る。現状は雜木林となっているが、第二次世界大戦の食糧難の頃2号塚と3号塚の間の平坦部は開墾して畠地として利用した事があるといわれている。

3基からなる本塚群の外面的観察では、1号塚が東西6m・南北6mの円形塚で高さは約60cmを測り、北側の裾部は東西に丸味をおびず直線的である事が注目された。墳頂部には直径1m強の凹地があって、土のしまりもなく、盗掘を受けている可能性があると思われた。また、周溝等の外部施設の痕跡はまったく見られなかった。2号塚は長径6m、短径4.5mを測る半月形を呈し、高さは南側平坦部から約40から50cmを測る。外面観察からはこれといった損傷を受けた痕跡は見られず、構築時の原形をよく留めているものと考えられた。3号塚は最北端に位置し、北側及び西側は崖面に接している。形態的には円形を呈し、長径4m、短径3.5m、高さ40cm強を測り、盗掘を受けた痕跡もなく構築時の原形をよく留めているものと考えられた。また、周溝等の外部施設の痕跡は全く見られなかった。1号塚と2号塚の中間に東西8m、南北5m程度の平坦面があり、微地形からも何かがあるのではないかと想定された。

伝承としては、本塚群の崖下には旧国道（県道黒部柏崎線）が一本通っているのみで、周辺は別山川で形成された湿地が広がり、葦が背丈以上に繁茂し、昼でもさびしい地域であったといわれている。人間が夕刻崖下のこの道を通過すると人玉が出没し、通りすがりの人々の背におぶさる様な事がしばしばあり、靈魂がまだ生仏できないのではないかという事で、鎮靈するために建立したのが道路沿いにある地蔵尊像（写真中央）であるといわれている。この地蔵尊建立に起因する伝承は、どの程度の信憑性があるのか否か疑問があるが、墓として本塚群が人々の心の中に意識されていた事は事実であろう。



地蔵尊像



第4図 狐山塚群全測図

## IV 外部形態と内部構造

### 1. 1号塚 (第5~7図、図版第2・3・5・6・10図)

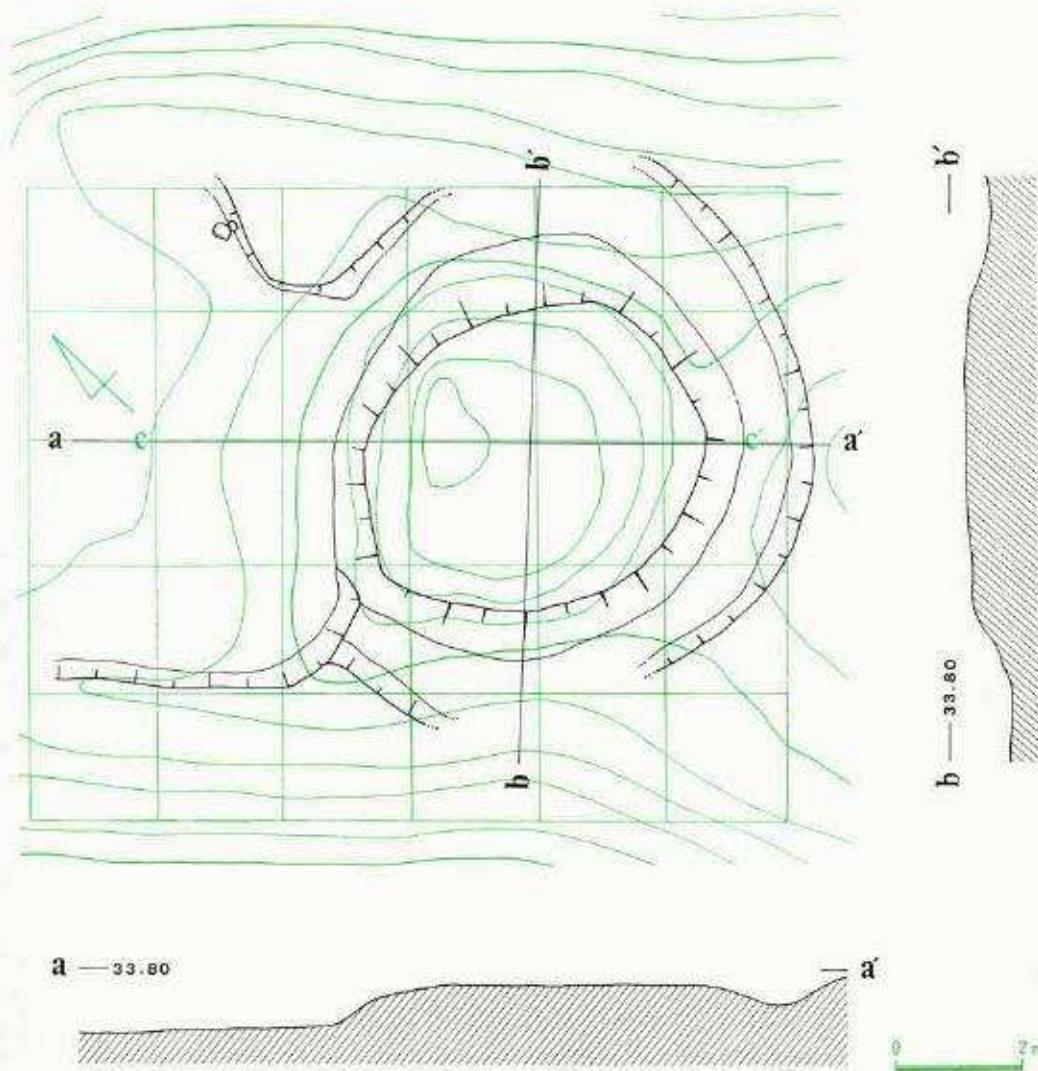
**墳丘** 塚の規模は北西・南東軸約6m、北東・西南軸約6m、高さ約60cmを測る。墳頂部にはくずれのためか一辺約3m四方の方形の平坦面があり、北側に一部土砂の盛り上りが見られる。西方向へ土砂の流れがあり、墳丘の平面形態としては北西部が方形、東南部が円形を呈し、全体としてはカマボコ形をしている。保存状況は良好ではない。

**盛土** 土層及び土の状態は断面図C—C' (第6図) に示すとおりである。第1層は表土で褐色砂質土の腐蝕土である。第2層は乾性で軟弱な淡褐色砂質土。第3層は乾性で軟弱な淡黄褐色土と乾性で軟弱な淡茶褐色砂質土の二種類がある。第4層は中央部のみの盛土で第2層の淡褐色砂質土と第5層の黒色粘質土の3枚からなる互層である。第5層は湿性で緻密な黒色粘質土と乾性で軟弱な暗茶褐色砂質土と湿性で緻密な茶褐色粘質土の三種類がある。第6層は湿性で緻密な暗黄褐色粘質土である。第7層は湿性で緻密な黄褐色粘質土の地山である。本塚の現存高は約0.8mで表土と地山との間は5層に別けたが、第6層の暗黄褐色土は薄く堆積しており、これは地山の黄褐色粘質土と第5層の黒色粘質土・暗茶褐色砂質土との漸移層的性格を持つものと思われる。第5層の黒色粘質土は旧表土であり、この第5層の茶褐色粘質土、黒色粘質土、暗褐色砂質土の三つの土質は湿性で緻密である。また、この第5層より上層の第2層から第4層までは乾性・軟質で、この4層を盛土したものと考えられる。構築方法としてはまず地山面(基盤層)まで掘り下げる周溝を巡らし、旧表土の上に第2層から第4層までを盛土したと考えられる。第5層の茶褐色粘質土は塚が掘り込み状遺構に切られており、当然周溝との区別が出来るはずであるが、肉眼的観察では確認することができず点線で示した。

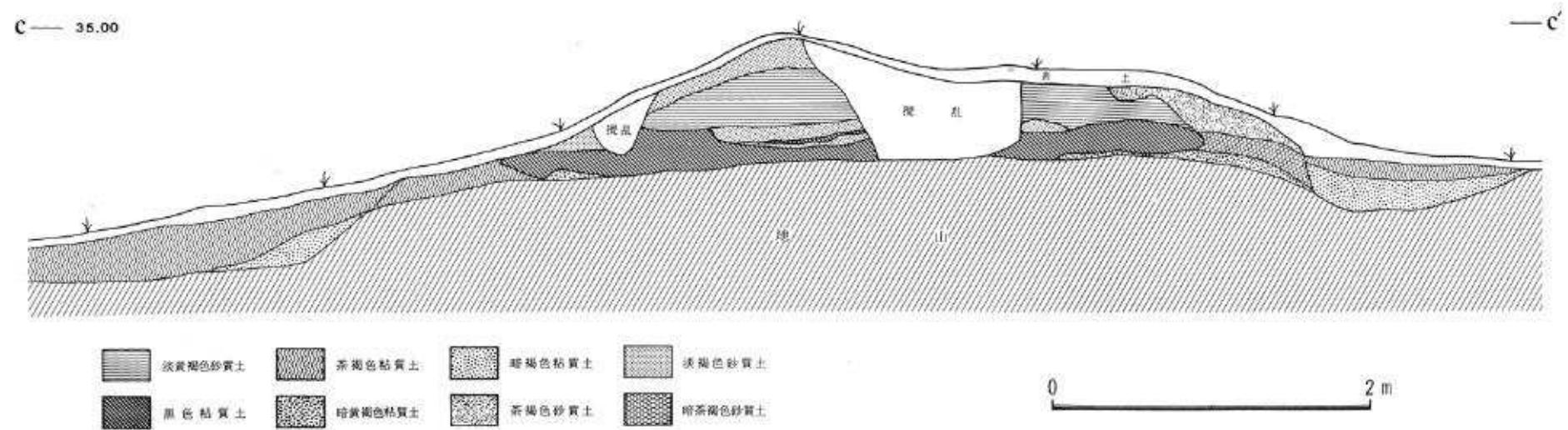
**周溝** 1号塚と2号塚との間にある掘り込み状遺構によって北側が、東側及び西側の一部が途切れているが、内径約5.3m、外径約8.5m、上端部の幅約1.5~2.3m、溝底幅0.6~1.2m、深さは周溝の確認面から約0.4mを測り、一圓している。周溝の断面形態は上部が広がる「U」字形を呈している。横断面図b—b'をみると多少の溝状の凹みがみられないこともないが、周溝が東側と西側の一部で途切れているのは、本塚が馬の背状の丘陵の緩斜面に立地しているためその部分に周溝を巡らすことが困難であったことや、東側及び西側が斜面になっているためにその部分に周溝を巡らす必要がなかったとも考えられる。周溝の北西部分は掘り込み状遺構によって切られているものの、周溝内の堆積土や土質等の状況は南側と同じであった。第1層は表土で褐色砂質土、第2層は湿性をもつ緻密な茶褐色粘質土である。第3層は湿性をもつ緻密な暗褐色粘質土であり炭化物が混入している。第4層は地山の黄褐色粘質土

である。第2層・第3層は自然堆積と考えられ、レンズ状を呈している。

当初から本塚の保存状況についてはあまり良くないと思われていたが、現状から塚の中心に中央線を設けて発掘調査を行った結果、塚の中心は南の方向にずれており、塚の基底部は北西・東南軸約5.6m、北東・西南軸約4.7mの楕円形を呈している。北西部部分の周溝は掘り込み状遺構の造成の際に破壊されているが、掘り込み状遺構が非常に浅かったために、塚と掘り込み状遺構の新旧関係は土層状態から明確にすることはできなかった。基底部においては、遺構といえる様なものは全く検出されなかった。塚の土盛中から中世陶質土器の壺形土器の胴部下半と口縁部片が検出されたが、内部施設が存在した可能性はあるものの大小2ヶ所の盜



第5図 1号塚実測図



第6図 1号塚断面図

掘の穴によって擾乱されているため、内部施設の有無については確認することができなかった。なお、本塚の高さを復元すると大略1.0m前後になると思われる。

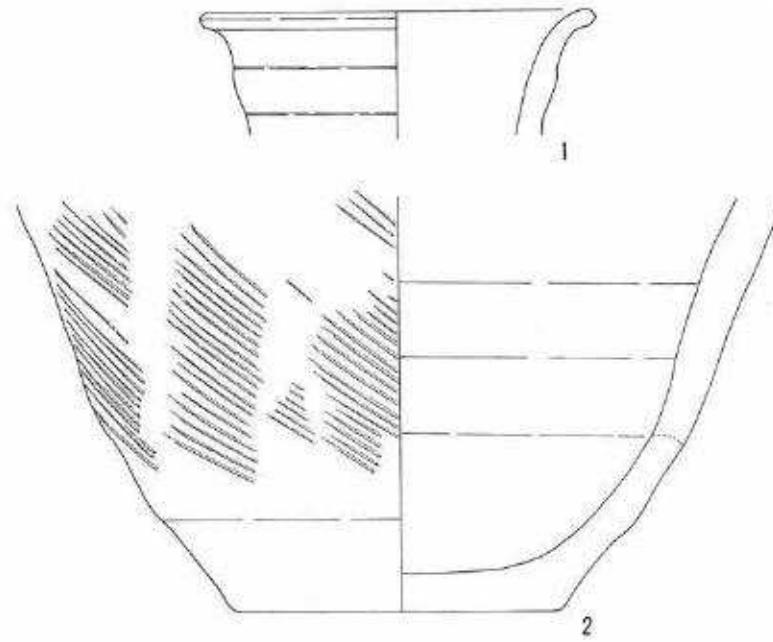
**遺物の出土状態** 個々の破片が単独に出土し、それぞれは原位置を保っているとはいわれない。第7図2は盗掘による擾乱土の中から直立した状態で検出されたものである(図版第10図)。また、近接した地点の表土層中から2と同一個体の口縁部片が細片となって2片検出されている。本来、中世の墳墓や経塚などでは墓石がしばしば見られるが、本塚においては石そのものの検出もなく、また壺形土器を埋置するための掘り込みも検出されなかった。おそらく、過去において盗掘をした際に、これらの遺物が検出され、そしてこの盗掘の穴を埋めもどす時これ等の遺物を投げ込んだものと考えられる。また、細片の2片は盗掘された時点で破壊されたものか否か明らかではないが、排土と一緒に墳丘裾部に捨てられたものであろう。なお、壺形土器の内部に充満していた土砂を詳細に取り出して観察したが骨片などは検出されなかったが、骨蔵器として壺形土器が利用された可能性は多分にあるものと思われる。

**出土遺物** 第7図1・2(図版第10図11・12)は中世陶質土器で、1は壺形土器の口縁部、2は壺形土器の胴部片である。1は推定口径10.8cmを測り、口縁の端部をゆるく外方へ引き出したもので端部は嘴状を呈している。口縁部は若干フクラミを持っており、内外面ともに入念な横ナデ調整が行われている。胎土には砂粒が混入され色調は暗灰黒色を呈している。2は胴部外面に幅約2.2cmで、9条の叩目を施したもので、叩目は右下りで、その深さは浅く途中で切れている箇所もある。内面は横ナデ調整ではあるが、部分的に指頭状の圧痕が残存している。

底部は静止糸切で切

り離されており、底  
面中央はヘラで磨消  
されている。更に切

り離し後についたと  
思われる圧痕が底面  
全体に見られる。胎  
土は緻密で、暗灰色  
を呈し、焼成も堅緻  
である。この種の土  
器は珠洲焼と呼ばれ  
るもので、上記の特  
徴から室町時代後半  
のものと推定される。

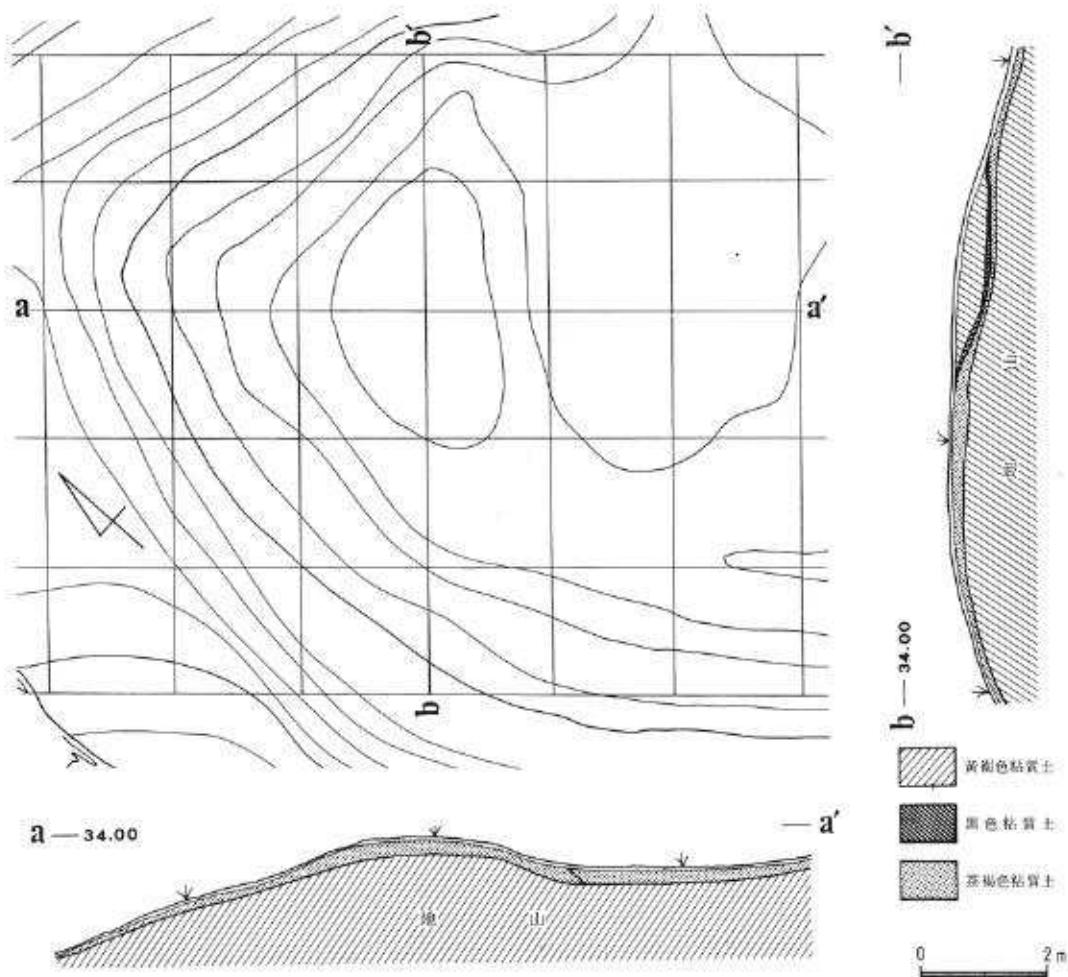


第7図 1号塚出土遺物(1/2)

## 2. 2号塚 (第8図、図版第2・3図)

**墳丘** 塚の規模は北西・南東軸約6m、北東・南西軸4.5m、高さ約50mを測る。墳頂部には約 $2 \times 4$ mの平坦面があり、墳丘の平面形態は半円形を呈している。南側からの高さは図版第2図で見られるようにあまり高くなく、わずかに盛られているという風に見うけられるが、北側から見ると(図版第3図)本塚群中、一番高くて保存状況も最良であると思われた。

**盛土** 土層及び土の状態は断面図a-a' (第8図)に示したように、第1層は表土の褐色砂質土、第2層は茶褐色粘質土、第3層は黄褐色粘質土の地山である。各層ともに自然堆積である。これに対し、断面図b-b' (第8図)の北東側では第1層がa-a'と同じ表土の褐色砂質土、第2層は黄褐色粘質土、第3層は黒色粘質土、第4層は茶褐色粘質土、第5層は黄褐色



第8図 2号塚実測図・断面図

粘質土の地山となっている。第2層の黄褐色粘質土の分布範囲はD-8・9、E-8・9にわたる3×4mの範囲でレンズ状に堆積している。この第2層の黄褐色粘質土はa-a'の地山である黄褐色粘質土と色調・性質が同じで後述する掘り込み状遺構を掘った際の残土と考えられ、第3層の旧表土と思われる黒色粘質土の上に盛ったものと考えられる。なお、断面図a-a'の第2層は掘り込み状遺構との境で土層の相違が認められるべきものであるが、肉眼的観察や土質の粒子などからは分離することは困難であったので点線で図示をした。

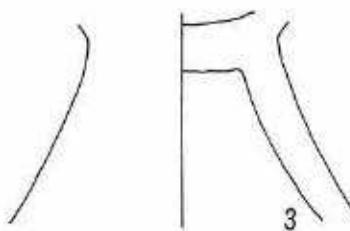
**周溝及び内部施設** 周辺部及び基底部と考えられていた黄褐色粘質土(地山)を精査したが周溝及び内部施設は検出されなかった。

この様な状況から本塚は塚とは考えられず、旧地形の丘陵緩斜面にあった地ブケレ状の微高地の東側に掘り込み状遺構の残土を盛り上げた結果、塚状を呈したものと考えられる。遺物は第1層の褐色砂質土中から散発的に土師器片が検出されている。いずれも細片となって内外面ともに磨滅しているために器形及び器面調整なども不明で、時期の決定さえ困難である。

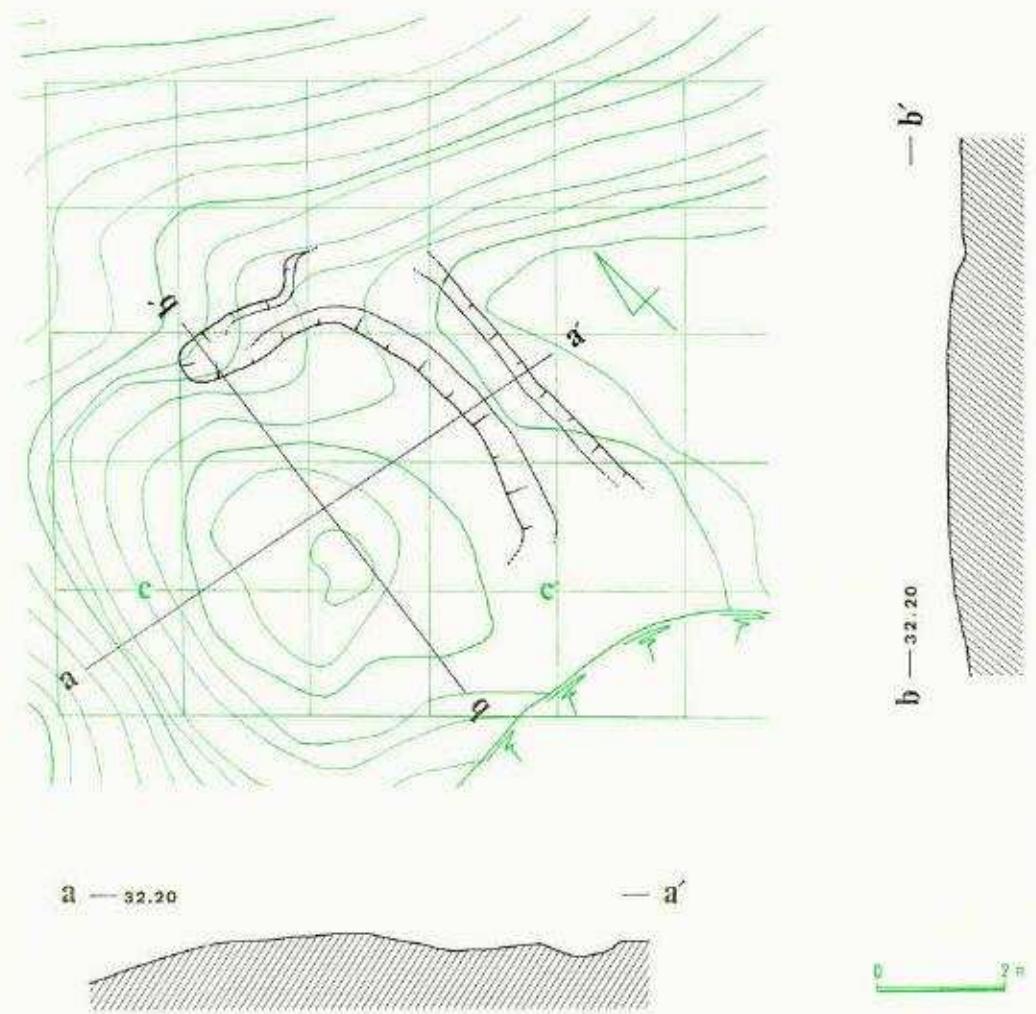
### 3. 3号塚 (第9~11図、図版第4・7・10図)

**墳丘** 塚の規模は北西・南東軸3.5m、北東・南西軸4.5m、高さ50cmを測る。墳頂部には約3×3mの平坦面があるが、南東部は一部盛り上っている。南北方向に土砂の流れがあり、墳丘の平面形態は南北に長い椭円形を呈している。全体的に保存状況はよくない。周辺部をみると、本塚の北東部に細い道状のものがあるが、これは第二次世界大戦中2号塚と3号塚の間の平坦部を開墾し、畠地として利用した際下から登ってきた道路である。

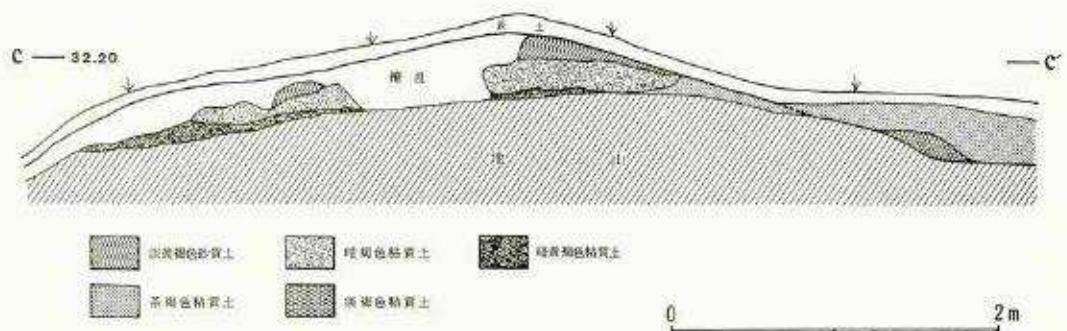
**盛土** 土層状態は断面図c-c' (第11図)の通りである。第1層は褐色砂質土の表土で腐蝕している。第2層は乾性で軟質な淡黄褐色砂質土。第3層は湿性があって緻密な暗褐色粘土と湿性があって緻密な茶褐色粘質土の二種類がある。第4層は湿性があって緻密な暗黄褐色粘質土。第5層は湿性があって緻密な黄褐色粘質土の地山である。第1層の表土から第5層の地山までは3層に識別されるが、第4層の暗黄褐色粘質土は第5層の黄褐色粘質土の漸移的性格をもつものと思われる。第3層の暗褐色粘質土は1号塚の黒色粘質土とは異なるが、旧表土と考えられる。第3層の茶褐色粘質土は本塚と南側裾部における堆積土との識別がなされるはずであるが、明確に識別することはできず点線で示した。墳頂部の中央は擾乱されて淡黄褐色砂質土・暗褐色粘質土・黄褐色粘質土(地山)が混じり、盗掘された穴と考えられる。この擾乱層は北側にまでのびており、おそらく盗掘をした際に捨てた排土と考えられる。また、第3層・第4層の暗褐色粘質土、茶褐色粘質土、暗黄褐色粘質土の三つの土質



第9図 3号塚出土遺物(2/3)



第10図 3号塚実測図



第11図 3号塚断面図

は湿性にとみ、かつ緻密であり、第2層の淡黄褐色砂質土は乾性があって軟弱である。このように、本塚は、第2層だけを旧地表面上に盛り上げているものと考えられる。

**周溝** 東側から北側にかけて逆「L」字状に検出され、断面形態は上部が広がる「U」字形を呈している。上端部の幅0.6~1.9m、溝底幅0.3~1.0m、深さは周溝の確認面から0.1~0.2mを測る。周溝内の堆積土は第1層が表土で褐色砂質土、第2層は湿性をおびた緻密な茶褐色粘質土、第3層は湿性を富む緻密な淡褐色粘質土、第4層は地山の黄褐色粘質土となっている。第3層はレンズ状に堆積しているが、第2層とともに自然堆積である。周溝が一部にしかみられないことは、北側が越後線及び国道建設工事の際に削り取られたものか、急傾斜面でそのあとにくずれたものか、当初から周溝を巡らす必要がなかったのかのいずれかであろう。同様に西側も当初から周溝を巡らす必要性がなかったのか、急斜面でくずれたものかのいずれかであろう。周溝の平面形態及び発掘前の形態などから、本塚は構築時点では一辺6m内外の方形を呈す塚であったと思われる。内部施設は中心部が盜掘されているため確認することはできなかった。

**遺物の出土状態** 塚の西側縁部から土師器の高环片が1点検出された(図版第10図)が、本資料が塚と有機的関係を持っているものとは考え得がたい。

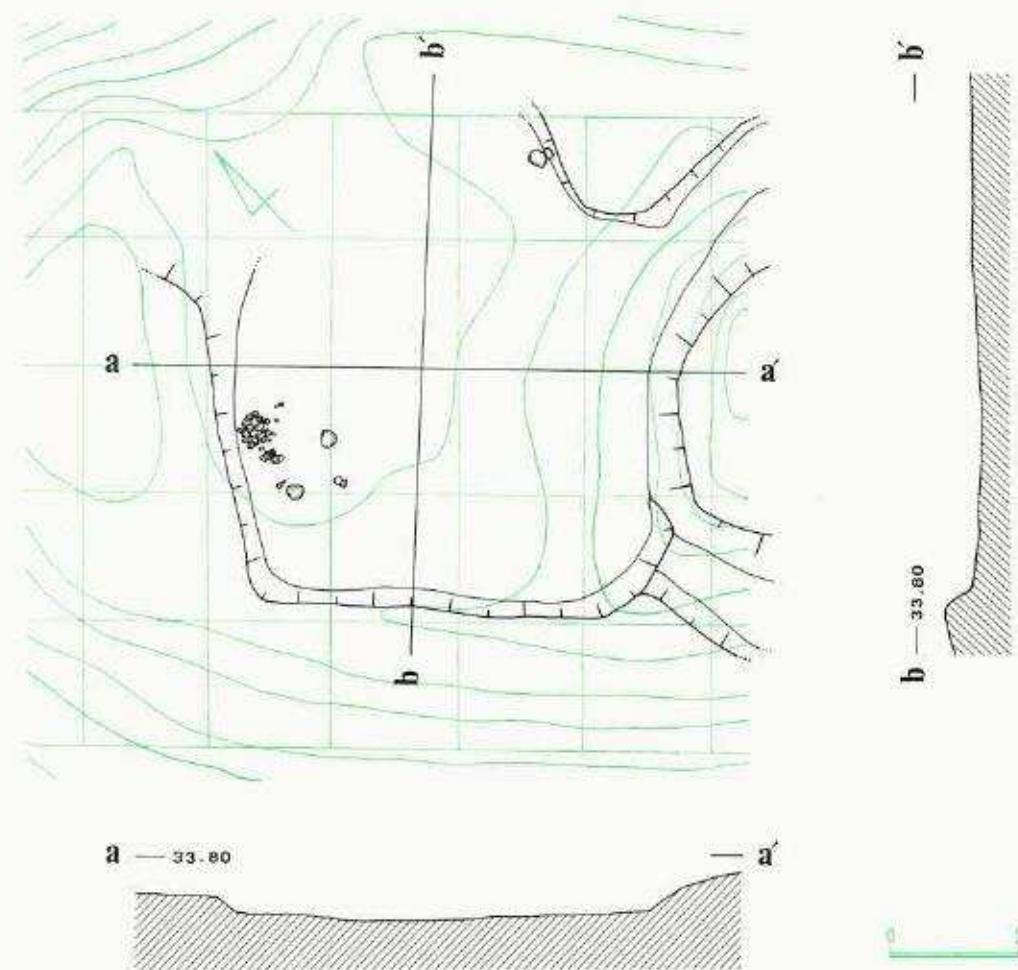
**出土遺物** 第9図は古墳時代の高环片で、脚部は大きく漏斗状に開いて裾部が大きく外返するものと考えられる。环部と脚部は接合されたもので脚部の内面には凸起がおしつけられた痕跡がある。环部の内面はヘラ状工具で研磨され、丹が塗布されている。外面は荒れているために器面調整は明らかではない。胎土には粗砂が混入され、澄褐色を呈し焼成は良好である。この土器の年代は、古墳時代前期のもので、五領式土器の新しい方に属するものであろう。

#### 4. 掘り込み状遺構(第12~15図、図版第8~10図)

1号塚と2号塚の中間に位置し、現状は1号塚と2号塚の裾部の緩かな斜面に6×6mの平坦面があって、等高線の流れ方からも何かがある事が当初から多分に想定された。

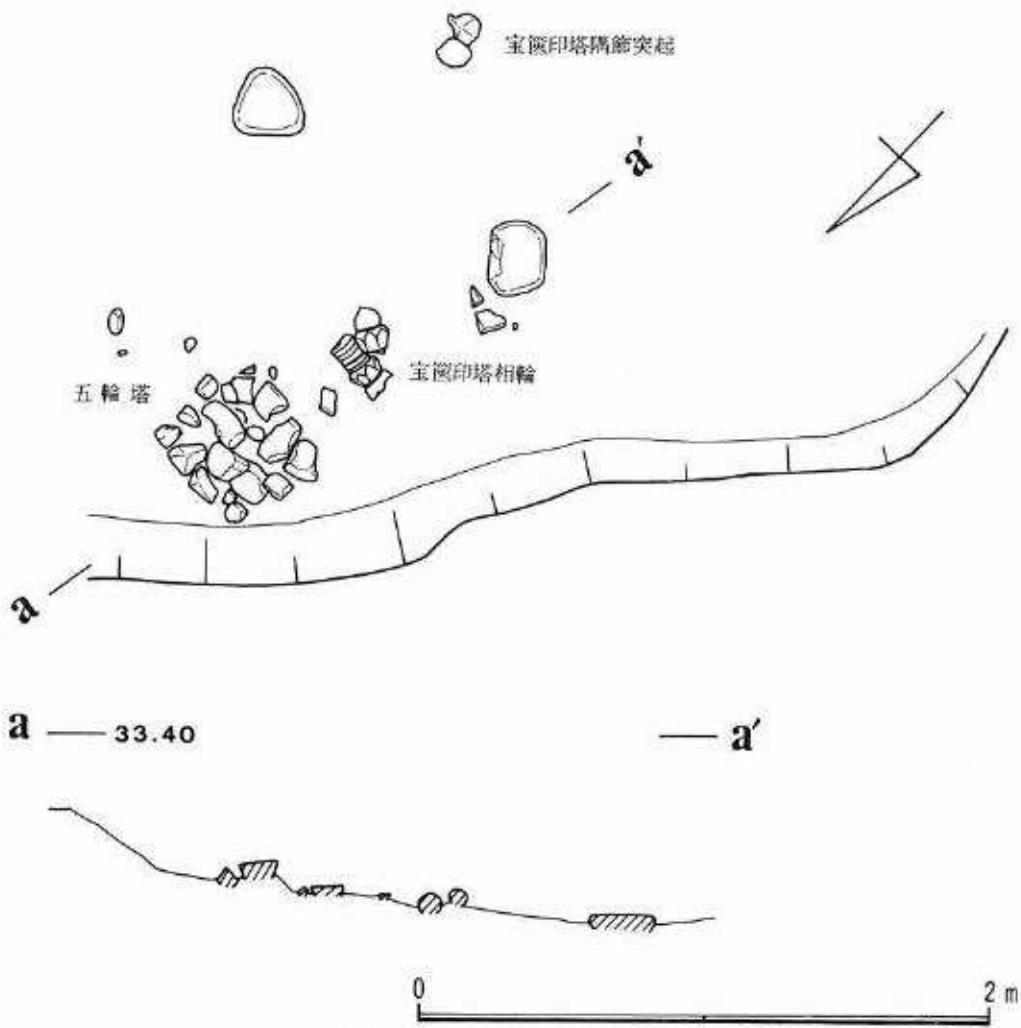
掘り込み状遺構は北側の一部から西側、それに南側が明確に掘り込まれているのに対し、北側の一部から東側にかけては不明確でその形も不整形を呈している。東側の一辺が6.2m、南側の一辺が約6mを測る。その規模は西側にとび出し部を持った方形で、東西約8m、南北約8m内外のものと考えられる。なお、1号塚の周溝と本遺構との関連は掘り込み状遺構の南西部隅においては本遺構が周溝を切っている。しかし、南東部隅においては掘り込みが浅くその新旧関係を把握する事は出来なかった。掘り込みの角度はゆるく、その底面は中央部に行くに従って深くなつて行く傾向がある。土層は第1層が褐色砂質の表土、第2層は湿性があり緻密な茶褐色粘質土、第3層は湿性があつて緻密な暗褐色粘土である。第3層は1号塚の周溝との接部にレンズ状に堆積している。

**出土遺物** 石造物と土器類の二種で、土器は第1層と2層から、石造物は地山面に接して検出されている。土器は散発的に出土し、全て原位置を保ってはいない。縄文土器1)、土師器(4)、須恵器(2)、中世土師質土器2)で、特に土師器は磨滅が著しく細片になっているものが多い。第14図4～6は須恵器で4が蓋、5が环である。蓋の天井部はヘラ削り調整され、内面は布様のもので横ナデされている。焼成が軟質なため天井部の稜線は磨滅している所もある。环の口縁部は内外面ともに横ナデ調整痕が見られる。6は甕形土器の口縁部片で頸部がくの字状に外反して口縁が内弯気味に立ち上っている。口縁部から頸部まで横ナデ調整がなされている。胎土に細砂粒を含み、焼成は堅く、従来土師器と呼ばれてきたものとは胎土・焼成が異なっている。7は土師器の底部で底部からの立ち上りは直立気味に立ち上って大きく開くもので、古墳時代前期後半のものであろう。8は縄文時代の中期後半から後期前葉にかけて普遍的に見られる深鉢形土器の胴部片である。従位に条線が施されている。図示はしていないがこの他に細片



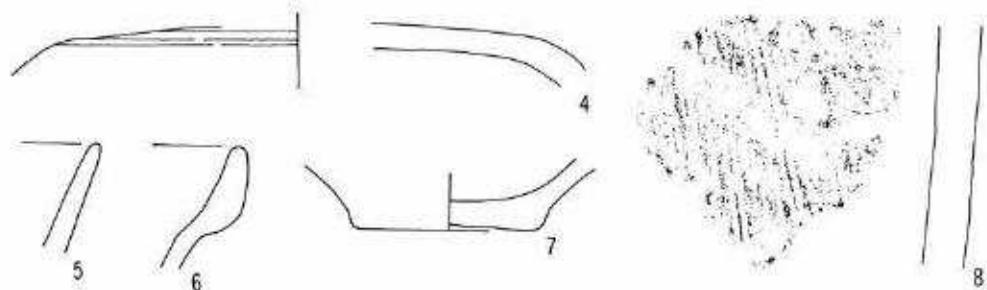
第12図 掘り込み状遺構実測図

となった中世の土師質土器片が出土している。灯明皿と呼ばれるもので胎土は精選され、色調は橙褐色ないしは暗褐色を呈している。石造物は北西隅付近でまとまって検出され、その出土状態は第13図・図版第9図のように五輪塔の残骸や宝篋印塔の残骸が検出されている。五輪塔の残骸は一辺約45cmの方形にまとまっており、火輪（図版第10図1）、水輪（図版第10図2～4）、地輪と思われるもの（図版第10図5～7）があるが、破片の絶対数が少なく、塔として成立しない。宝篋印塔も相輪部（図版第10図10）と笠の隅飾突起（図版第10図8・9）2点しか残存していない。五輪塔の火輪の傾斜は約60度を測り反りを持っている。頂部には直径4.5cm、深さ2.7cmの円形の納穴があり、発心門の種子「蓮」が薬研形で一面のみに彫まれている。石材は硬質砂岩である。水輪の底径は16～17cmを測る大形のもので、種子等は刻まれてはいない。地輪は全体の形を留めるものは1点もない。宝篋印塔の相輪部は宝珠から伏鉢まで一石で作られたものであるが、九輪部から折れているため、九輪か否か定かではない。上下端の請花部分の装飾は通有

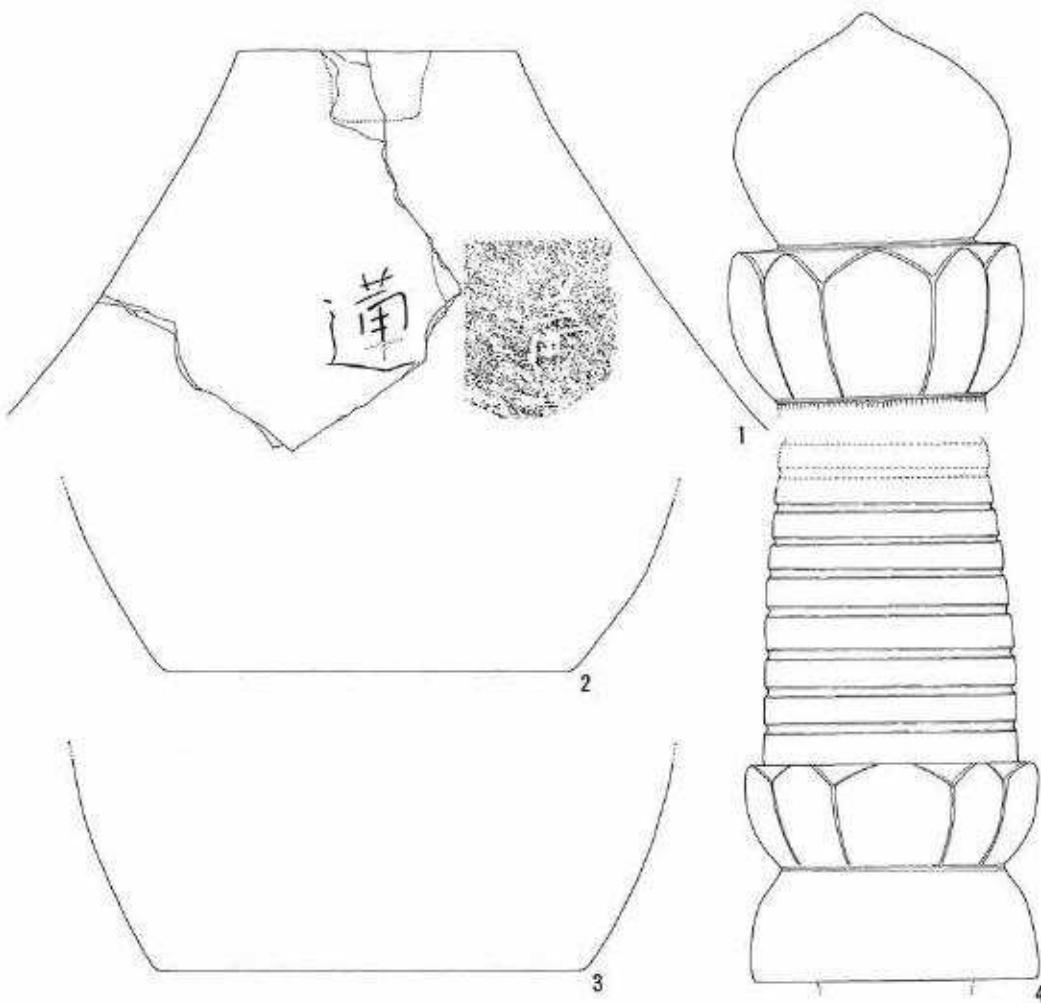


第13図 石造物出土実測図

の蓮花が彫まれている。枘は折れて欠失し、石材は凝灰岩である。隅飾突起は部分的で軒との傾斜は定でないが、内側は二弧からなる輪郭が巻かれている。いずれにも紀年銘などは書かれていらないが、石造物の特徴から大略室町時代頃のものと考えられる。



第14図 掘り込み状遺構出土遺物1 (2/3)



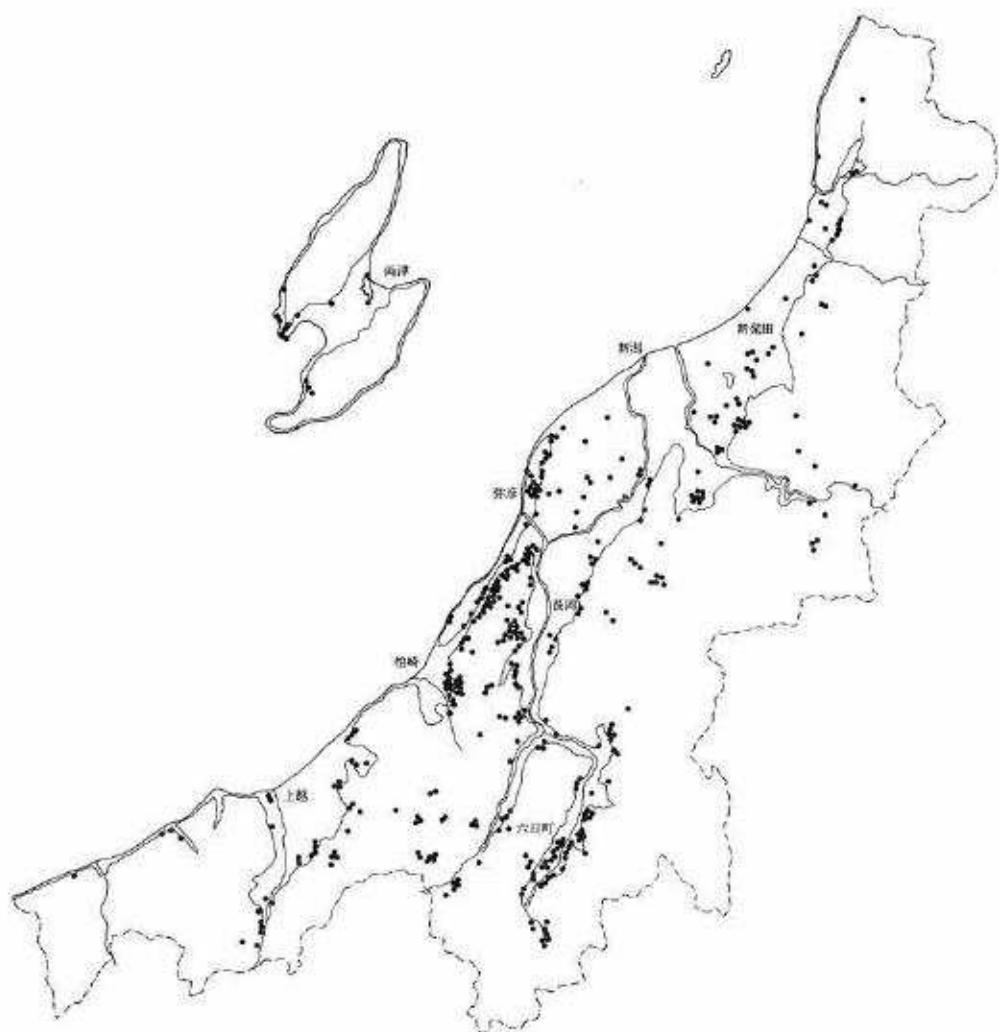
第15図 掘り込み状遺構出土遺物2 (1/3)

## V 総 括

### 1. 新潟県における塚について

県内における塚の研究史については既述したことがあるので省略するが、これ以後の研究成果を踏まえて、塚の分布及びその問題点などについてふれて行きたい。第16図は県内の塚分布模式図で、昭和50年県教育委員会が刊行した「新潟県遺跡地図」とそれ以後新しく発見されたものを追加して作成したものである。なお、黒のドットは広義の塚を意味し、民間信仰に伴う塚、経塚、墳墓、一里塚等時代に関係なくドットしたもので、位置・基数を具体的に示したものではなく、群として存在するもの、単独で存在するものというように細分はせず集中地域が理解できるように作成したものであることを先にことわっておきたい。

県内における塚は昭和53年度現在1,474基を数え、分布調査の緻密さの度合によってかなりの差があるものと考えられるものの、今後更に分布調査が行われればその数は必然的に増加するものと考えられる。第16図をみてもわかるように全体的傾向として丘陵地及び山間部に分布しているものが圧倒的に多く、平野部にあるものは比較的少ない傾向にある。丘陵地と平野部の地形変換点に線としては結びつく可能性はないが、点として塚が存在している事実がある。特に、柏崎市周辺、西山町～寺泊町、弥彦村周辺、長岡市の周辺部、湯沢町～六日町にかけてはその集中度が強く、他地域とは全く異なっている。この傾向は何に基づいているのか今後の検討材料としなければならない問題でもある。塚の大部分は単に数多く存在していれば○○塚群とか○○1号塚・○○2号塚と一連番号を付したり、単独で存在していると○○塚と呼称されているのが一般的で、現在の地名及び通称を用いている。塚にも塚のあり方があると考えられ、群として存在しているものについては種々の構成がある。かなりの広範囲の地域に疎散的に分布するもの、小地域に密集するもの、形態的には円形ないしは方形だけで群構成をなすもの、円形と方形とで群構成をなすもの、規模からは大形のものないしは小形のもので群構成をなすもの、大形のものと小形のものとで群構成をなすもの、築造の時期からみれば、ある限られた時期に築造されたもの、長期間にわたって築造された成層的な構成がみられるもの、継続的に築造されていたのが途中で中斷されている場合など種々なあり方がある。塚の立地条件は低丘陵の頂部を利用したものや山地から派生した尾根や丘陵端を必要な所から切断して利用したものがあり、これには等高線と直角の場合と等高線に平行な場合がある。また、洪積台地の台地端や台地上にあるもの、平坦地域の微高地を利用したもの、平地や傾斜変換線付近の独立丘陵上を利用しているものなどがあるが、個々の塚を現集落との関連で考えると、集落の出入口や集落郊外および旧街道に沿ってあるものが多く、集落内に存在するものは極めて少ないとえよう。更に、これらの塚には十三塚・供養塚・入定塚あるいは民間信仰に関する伝説を



第16図 塚 分 布 模 式 図

持っているものが大部分を占めている。しかし、これらの塚の大部分は塚構築の目的・構築者を示唆する積極的証左は見られず、何時・誰が・何の目的で構築したのか否か不明である。発掘調査をして、内部構造ないし遺物が検出されれば、時代と塚の性格付けがある程度なされるが、何の遺構・遺物も検出されない場合が多い。このような場合、ただ単に民間信仰に伴う塚と解釈され勝ちであるがはたしてこれでよいのであろうか。発掘調査によって塚の性格付けが行われる事も考古学的には重要であるが、再度詳細な分布調査を行い、塚のあり方・立地条件などを整理・整頓を行う必要性があるのではなかろうか。更に、歴史学・民俗学はもちろんのこと、歴史地理学的な見方で、塚の存在を裏付けた中世ないしは近世村落のあり方、その中ににおける信仰の問題（神社・寺院など）、旧街道・石造物等の調査をすることによって当時の生活地

域・文化圏等数多くの問題提起がなされ、これらの総体の中で、塚の存在する意義が明らかにされるものと思われる。

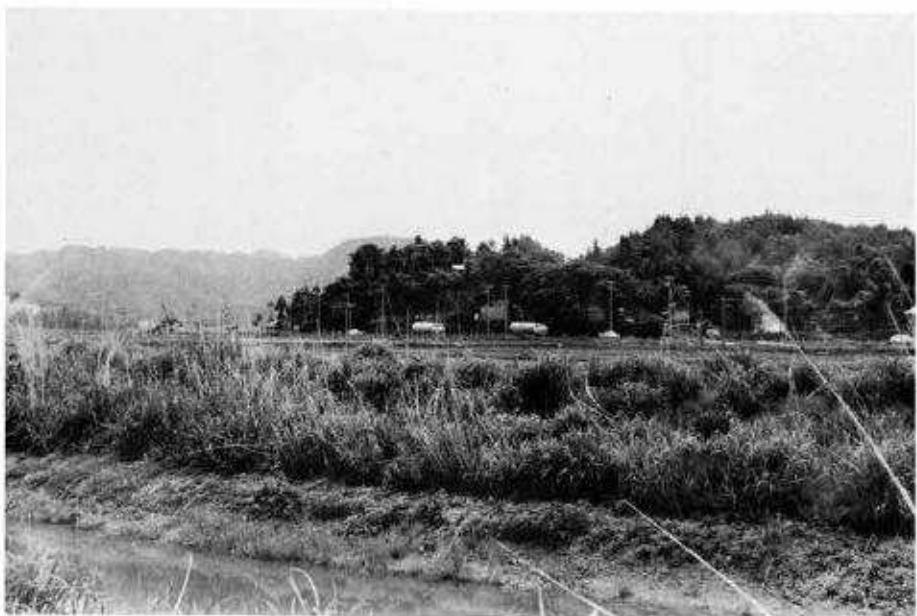
## 2. 狐山塚群について

狐山塚群の周辺地域には礼拝塚群が存在しているが、本塚群がこの塚群と一体となって群をなしていたのか、あるいは本塚群のみで存在したのかについては確たる証左がないため明らかではない。立地条件・塚のあり方から考えると、本塚群は周辺の塚群とは関係なく存在したものと考えられる。塚の立地については集落より高い所にあるものと集落より低い所にあるものとがある。いずれも多くは耕地にならぬ地を選んでいる。当地域は谷口の微高地に集落があり、丘陵の山裾に集落があるため、平地の耕地に制限された結果、集落より高い所に塚が構築されたものと思われる。発掘調査の結果、塚と認められるものは1号塚と3号塚の2基で、1号塚は円形の、3号塚は方形を呈していたものと判断された。しかし、2基とも過去において盗掘されているために内部構造を明らかにすることはできなかったが、少なくとも1号塚はその出土遺物から室町時代頃の墳墓といえよう。1号塚の北側に掘り込み状遺構が存在しているが、1号塚の北側基底部及び周溝の一部が切られていることから1号塚よりは新しいものと考えられる。掘り込み状遺構の底面に接して五輪塔・宝篋印塔の残骸が検出されているので、五輪塔・宝篋印塔を伴う遺構とも考えられる。しかし、これらの石造物の出土状態からは完全なものとはならず、石塔として成立しない。石塔は供養塔婆と考えられるものの、この様な出土状態から考えると、造立したものを当所で破壊したものか、破壊したものを他所から運び込んだものか、あるいは当所で自然的にこわれたもののいずれかであろうが、当所で破壊したものが残存していたと解釈されるのではなかろうか。田中久夫氏は<sup>(註1)</sup>両墓制における第2次的墓地の例から50年代をすぎると「トウタオシ」とか「トイアゲ」とかいわれて実際に石塔が片付けられたりすることが和歌山県那賀郡貴志川町内にあるといわれている。このように考えると堅固な石塔も経木塔婆や板塔婆と同様、本来は長く祭の対象とするよりは年忌にあたってそれを建てるに意義があったものであろう。更に各種の塔婆は病疾を救うためや病氣平癒や追福に供えて建立されるが、埋葬地点に建てられたものは陀羅尼の呪力によって墓にひそむと考えられた物性を退散させようとの意図にもとづくものとし、ことに庶民層の場合は密教的な高遠な理論よりも具体的な実質的な物性退散の魔力が身近なものとして受け取られた結果、普及したものではないかと考えられている。いずれにせよ、この石塔類が1号塚に供うものか、3号塚に供うものか、あるいは1号塚・3号塚に供うものか、3者のいずれかであって、そこにはそれなりの原因・理由が存在していたはずで、今後の研究を待ちたい。

註1 田中久夫「死体遺棄の風習について」近畿民俗36号 昭和40年

2 田中久夫「卒塔婆建立の意味」近畿民俗51号 昭和45年

図版第1図



狐山塚群の遠景（西側から）



狐山塚群の遠景（東側から）

図版第2図



1号塚・2号塚の近景（北側から）



2号塚・3号塚の近景（南側から）

図版第3図



1号塚の全景（南側から）



2号塚の全景（北側から）

図版第4図

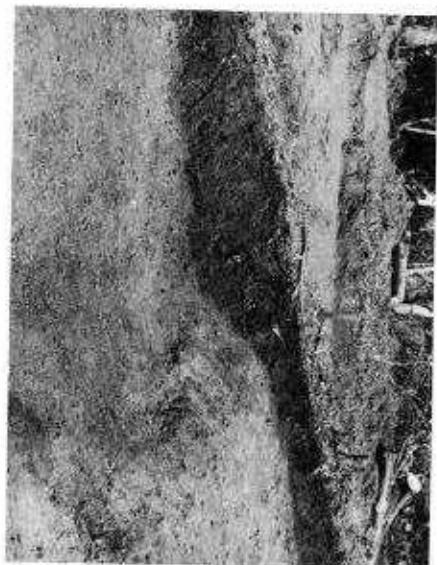


3号塚の全景（北側から）

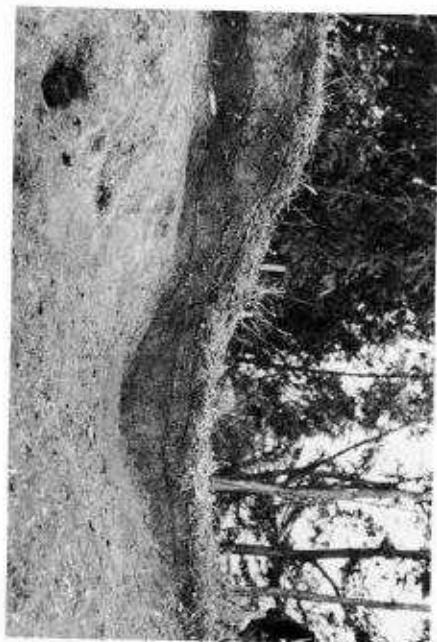


発掘スナップ

図版第5図



1号塚土層断面



1号塚南側周溝



1号塚北側周溝

図版第6図



1号塚基底部（北西から）



1号塚基底部（北から）

図版第7図



3号塚基底部（南から）



3号塚基底部（北から）

図版第8図



掘り込み状遺構（南から）



掘り込み状遺構内石造物出土状態

図版第9図

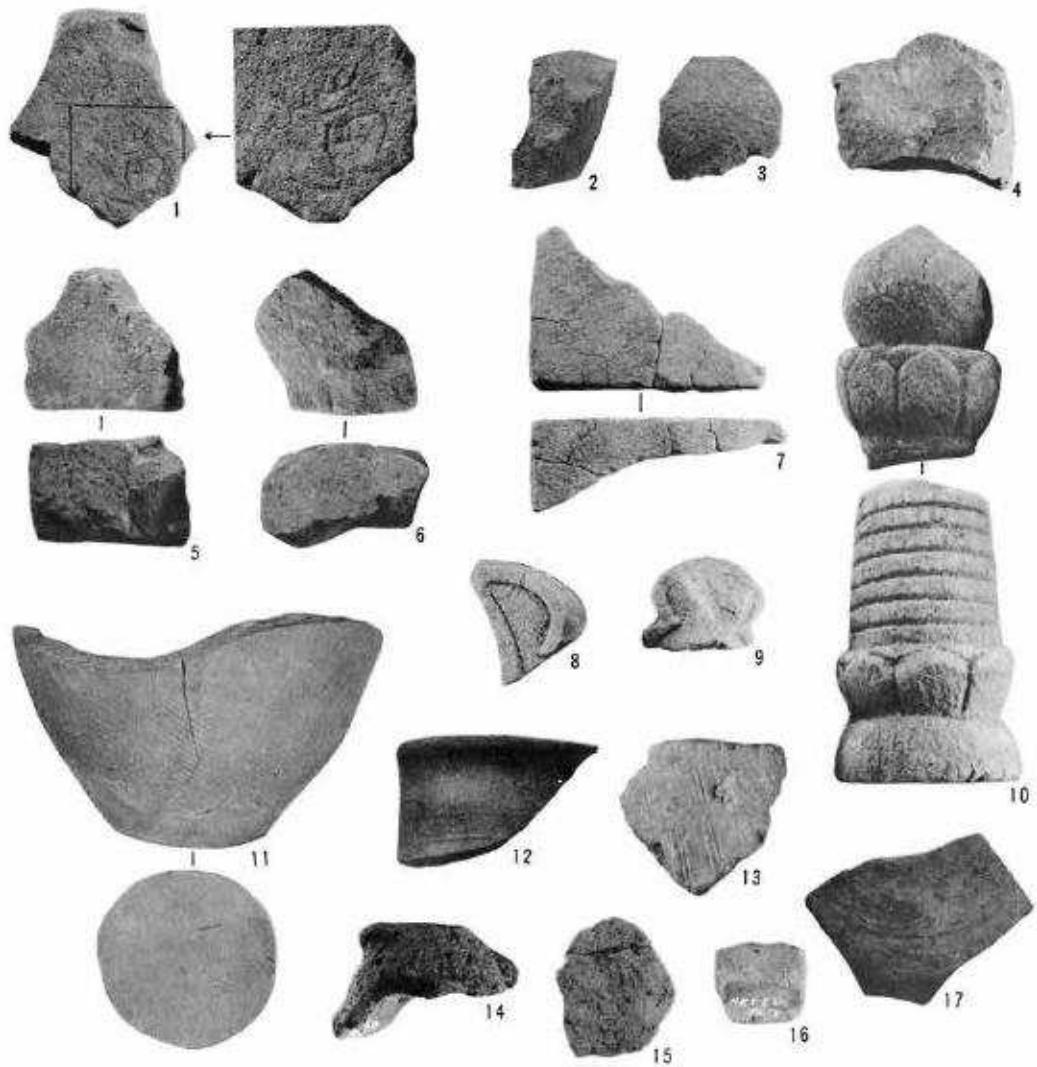


石造物出土状態（北西から）



石造物出土状態（西から）

図版第10図



遺物の出土状態と出土遺物

新潟県埋蔵文化財調査報告書第17

国道116号線

埋蔵文化財発掘調査報告書

狐山塚群

昭和54年3月29日印刷

昭和53年3月31日発行

発行 新潟県教育委員会  
印刷 (有) 双葉印刷

### 新潟県埋蔵文化財調査報告書第17正誤表

頁	行	誤	正
1	上から 5 行目	誘 地	誘 致
9	下から 6 行目	生 仏	成 仏
14	上から 2 行目	50 m	50 cm
18	上から 11 行目	従 位	縦 位

奥付	誤	正
	昭和 53 年 3 月 31 日 発行	昭和 54 年 3 月 31 日 発行